

# ソシュールの記号学にみられる 二つのアスペクト

——国語教育学における文化論的視座として——

戸 田 功

## 1. はじめに

スイスの言語学者フェルディナン・ド・ソシュール (Ferdinand de Saussure 1857～1913) が、現代人文諸科学の方法に関する変革の中心にあったことは、もはや常識の領域に入ろうとしている。けれども、その変革が実際にどのようなものであり、現在の学問状況にどのように影響しているのかについては、私達ははっきりとした知識を持っていない。例えば、ソシュールに由来するとされる記号学について、私達は実際の所それがどのようにソシュールの影響を受けているのか知らない。そこで本研究では、ソシュールに由来するとされる記号学について、その現状とその由来を検討し、そこから現段階における記号学のふさわしいあり方について考察したい。

## 2. 記号学の現状

現代的な意味での記号学の構想が初めて語られたのは1916年に出版されたソシュールの『一般言語学講義』である<sup>1)</sup>。そこでは次のように語られている。

言語は観念を表現する記号の体系であり、そうとすれば、書とか、指話法とか、象徴的儀式とか、作法とか、軍用記号とかと、比較されうるものである。ただそれはこれらの体系のうちもっとも重要なものなのである。

そこで、社会生活のさなかにおける記号の生を研究するような科学を想像してみることができる；それは社会心理学の・したがって一般心理学の一部門をなすであろう；われわれはこれを記号学 (sémiologie. ギリシャ語の *sêmeion* 「記号」から) とよぼうとおもう。それは記号がなにかから成りたち、どんな法則がそれらを支配するかを教えるであろう。それはまだ存在しないのであるから、どんなものになるかはわからない。しかしそれは存在すべき権利を有し、その位置はあらかじめ決定されている。言語学はそうした一般科学の一部門にほかならず、記号学が発見する法則は言語学にも適用されるにちがひなく、後者はかくして人間の事象の総体のうちでよく定義された領域に結びつけられることになる<sup>2)</sup>。

ソシュールの構想はその後長い間、単なる予言にとどまっていたのであるが、徐々にソシュールが構想した記号学に対する要請が高まり、1964年、ソシュールの影響を受けた R. バルトはその著『記号学の原理』の序で次のように述べる。

記号学なるものが存在すべきだということは、今日では、一部の学者の思いつきか

らではなく、いわば現代社会の歴史から必然的に要求されるものだと言ってもよいだろう。

しかし、ソシュールの考えがその後非常に進展をみたとはいえ、記号学なるものは今日でもはっきりした形をとってきたわけではなく、遅々とした進展を続けている<sup>3)</sup>。

記号学の存立に対する1964年時のバルトの状況認識は、以下に挙げる1980年の日本記号学会設立趣意書にみられる状況認識にそのまま受け継がれている。

最近、人間の諸活動において（そして、おそらく生物一般の営みにおいて）記号の果す役割の重要性がますます広く認められてきました。記号現象は、認識・思考・表現・伝達および行動と深く関わり、したがって、哲学・論理学・言語学・心理学・人類学・情報科学等の諸科学、また文芸・デザイン・建築・絵画・映画・演劇・舞踊・音楽その他さまざまな分野に記号という観点からの探求が新しい視野を拓くものと期待されます。しかるに記号学ないし記号論は現在まだその本質について、内的組織について、方法について不明瞭なところが多分に残存し、かつその研究が多数の専門にわたるために、この新しい学問分野の発展のためには、諸方面の専門家相互の協力による情報交換、共同研究が切に望まれます<sup>4)</sup>。

1989年現在、この状況認識はそのまま通用させることができるだろう。記号学は文化現象一般を捉えるのに有効な新しい学問領域としてますます注目され、広く使われることが期待されるようになった。けれども、以上見てきたように、現段階においては記号学そのものが未だ確定しておらず、理論的根拠があいまいなため、使いたくても使えない状況にある。そして、そのあまりに遅々とした進展に、最近では記号学の危機を唱える声も出始めているという<sup>5)</sup>。

では、記号学は何故そのような曖昧な状況に陥ってしまっているのか。その理由を、筆者は、ソシュールの構想から展開し、現在までの記号学の実質的な担い手であるフランス構造主義のあり方が、そもそものソシュールの構想とズレていたためであると考え。そこで、以下、ソシュールの構想とフランス構造主義との関係を明らかにし、そこから現在の記号学が陥ってしまっている曖昧な状況の原因を探りたい。

### 3. ソシュールにおける記号学の構想

#### (1) ソシュール『一般言語学講義』における記号学

ソシュールにおける一般言語学や記号学の構想を考える上で、絶対に避けることができないのは、拠るべき資料の選択である。ソシュールにおける記号学の構想は、一般に影響を与えたものとしては、彼の講義を聴講した学生のノートを彼の弟子達が編纂したものである『一般言語学講義』に、そして、ソシュール自身がそれについて実ほどのようなことを考えていたのかということについては、いわゆるソシュール文献学の成果であるゴデル著『一般言語学講義原資料』やエングラール版『一般言語学講義』等の資料に拠る必要がある。

今ここで検討したいのは、フランス構造主義に影響し、現在の記号学という考え方の根本にあるところのソシュールの構想である。そこで、一般に影響したところの『一般言語

学講義』において記号学はどのようなものとして構想されているのか、その基本的な特徴を確認しておきたい。

先に見たように、『一般言語学講義』には、記号学は、「社会生活のさなかにおける記号の生を研究するような科学」として構想されていた。それは将来的には、言語学をその内に含んでそれを基礎付けるものとされ、その発展のためには特に言語学的な知見が重要であるとされた。つまり、ソシュールの『一般言語学講義』において、記号学は「記号を」研究する学問としてその領域があらかじめ確保されているのである。

しかしながら、『一般言語学講義』においては、それ以上の言及はなく、他はすべて、記号学の中で重要な位置を占めるとされる言語学についての議論で占められている。つまり、『一般言語学講義』における記号学の規定とは、言語学もそこに含むような学問領域として、社会生活の中に存在する記号を研究する学問、すなわち記号学が、現在は成立していないけれども、将来的に成立しなければならないことを言っているのみで、その具体的な展開については殆ど何も触れていないのである。

では、ソシュール自身は本当はどのような記号学を考えていたのだろうか。そこで、『一般言語学講義』とは別に、ソシュール自身の考えを探るために、『一般言語学講義』として編集される以前の、また、編集されなかった学生のノートや彼の手稿（以上をまとめて『原資料』とよぶことにする）によって、ソシュールが本当はどういうことを考えていたのかを検討し、記号学をめぐる概念的混乱を整理する手掛りを得たい。

## (2) ソシュール『原資料』における二つの記号学

(1) に見たように、『一般言語学講義』においてソシュールの構想した記号学とは、「社会生活のさなかにおける記号の生を研究するような科学」のことであった。言語学も、将来成立するべきであろう記号学の一部門としてその中に位置付けられた。しかしながら、そのような強い断言にもかかわらず、「記号を」研究する学問としての記号学は『一般言語学講義』の中で実際には展開されていない。なぜなら、最近になって明らかになったことであるが、ソシュール自身は、言語学、ひいては記号学の一般理論を構想するに当て、以下に述べるような方法論上の難問に悩まされていたからである。

ソシュールの死後発見された一般言語学に関する彼の手稿に、次のようなものがある。

言語研究の題材を掘り下げるとつれ、いよいよ得心のいく一つの真理がある。それは独特の反省に人を誘うもので、このことを偽るのは無駄であろう。その真理というのはつまり、この領域では、事物の間に結ばれる絆は、事物そのものよりも先にあり、むしろそれを決定するのに役立っているということだ。他の領域では、まず事物が、与えられた対象というものが、次にそれが様々な視点から自由に検討される。こちらでは、成否はともあれ初めに視点が、しかもただひたすら視点だけがあり、そこから事物が二次的に作り出されるのである。この創出は、出発点が正しければ現実に照応するし、そうでなければ照応はない。だが、いずれの場合であれ、どんな事物や対象も、片時としてそれ自体で与えられることはない<sup>9)</sup>。

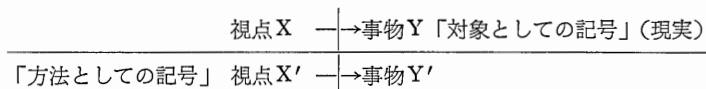
ソシュールによれば、言語学は言語記号を対象にする学問であるが、その言語記号は物理的な対象として客観的に存在してはいない。記号とは人間の心理現象によって存在して

いるものであり、それらは人間の頭の中で主観的に構成されたある「視点」によって作り出されたものなのである。そのような記号という「現実」を対象にし、それを明らかにするためには、その「現実」を作り出していると同じ「視点」を設定する以外に方法はない。そうやって同じ現実を作り出すことができれば、その「視点」は対象としての記号を明らかにしたことになるというのである。

ところで、ソシュールがそのような対象としての記号を明らかにするために意図的に設定すべきだという「視点」は、それによって対象としての記号という「現実」を新たに作り出すためのものである。言い換えれば、方法としての記号を設定し、それによって対象としての記号を再構築しようということである。そこから私達は、対象としての記号という「現実」を作り出すべく設定される「視点」を、「方法としての記号」、それによってはじめて与えられ、同時に明らかにされる「現実」を、「対象としての記号」と呼ぶことにする。

ソシュールの構想した記号学は、『一般言語学講義』にもあるように「社会生活のさなかにおける記号の生を研究するような科学であるから、当然、「対象としての記号」を研究する学問である。しかし、「対象としての記号」ははじめから与えられてはおらず、そのためには、「方法としての記号」を設定することが必須の条件なのである。私達はひとまず、それらをソシュールの記号学における二つのアスペクトとして抽出することにする。以上を図にすると次のようになる。

図 1 ソシュールにおける「方法としての記号」と「対象としての記号」  
対象と方法は区別されているが、両者の接点が存在しない



記号を対象としようとする限り、厳密な意味では、ソシュールが言うように「対象としての記号」はそれ自身として与えられていない。つまり、「方法としての記号」を使って研究することはできるけれども、それだけでは、「対象としての記号」を明らかにしているという原理的な保証にはならないのである。ソシュール自身はこの問題を最後まで解くことができなかった。そしてそれが、彼が一般言語学理論を最後まで発表することができなかった一つの理由であると考えることができる。

つまり、ソシュールにとって、「記号を」研究する記号学は、同時に「記号で」研究する記号学でなければならなかったのであるが、彼は両者の接点を理論的に見いだすことができなかったのである。

#### 4. フランス構造主義における記号学

私達が現在問題にしている記号学という学問領域は、『一般言語学講義』にある記述に基いて、「記号を」研究する学問として一般に認められている。しかしながら、ソシュールに学び、現在までの記号学の実質的な担い手となったとされるフランス構造主義の研究

は、以下明らかになるように、必ずしも「記号を」研究しているわけではない。では、ソシュールにおける「記号を」研究する学問としての記号学は、フランス構造主義においてはどのような学問として展開されたのだろうか。

フランス構造主義における記号学のあり方とのズレを見るために、まず、フランス構造主義において、「構造」がどのように考えられているかを見てみよう。

「構造」という言葉はソシュールが提唱したものではなく、彼自身は同じようなことを言う時には「体系」という言葉を使っていた。けれども、「構造」という考え方は、明らかにソシュールに由来するものとされている。例えば、ソシュールの流れを汲むフランスの言語学者エミール・バンヴェニストは、「構造」という考え方がソシュールに由来するものであることを次のように説明する。

ソシュールにならって、言語をそれ自身として、またそれ自身のために考察し始めたとき、言語学者は、言語が体系をなすというあの原理の正しいことを認めた。これが後に、現代言語学の基本原理となるのである。いかなる言語についても、どのような文化の中でその言語が用いられていても、またその言語のいかなる歴史状態をとっても、このことは成り立つ。基底から頂上まで、音に始まってもっとも複雑な表現形式に至るまで、言語とはその構成部分が体系的に配列されたものである。言語は形式的要素で組み立てられ、それが、構造の一定の原理に従って、変異可能な種々の結合の形に分節されている。ここに、言語学のかぎを握る第二の用語としての構造が出てくる<sup>7)</sup>。

バンヴェニストによれば、言語学は、現代的な意味では言語の体系の「構造」を対象に研究するものであるが、彼は、その場合の「構造」を、言語の諸要素を一段上に立って説明するもの、すなわち方法的なものとして考えていた<sup>8)</sup>。つまり、ソシュールと違い、バンヴェニストの場合、「構造」とは科学上の仮説であって、あらかじめ与えられている言語の諸要素によって検討することができるものと考えられていたのである。「構造」とは、人間的な事象を認識するための科学的な仮説である。バンヴェニストは「ことばの結構こそ、あらゆる記号体系を限定するものである<sup>9)</sup>」ことを唱え、言語学が明らかにする言語の「構造」を、他の人間諸科学の方法的な仮説として活用することの有効性を示唆する。つまり、ソシュールにおける「体系」は、「構造」という言葉に言い換えられることによって、対象的な意味あいの強いものから方法的なものへと変換されたのである。

フランス構造主義は、人間的事象を統一的に捉えることができるような科学上の仮説として、「構造」を設定するという共通の方法的基盤を持っている。その一例としてフランスにおける構造主義の提唱者の一人、文化人類学者クロード・レヴィ＝ストロースにおける「社会構造」という観念を見てみよう。レヴィ＝ストロースは「社会構造」に関して次のように説明している。

まず基本的に認めておかなければならないのは、社会構造の観念は、経験的実在にかかわるものではなく、経験的実在にもとづいてつくられたモデルにかかわっているということである。このようにみるならば、あまり近接しているためにしばしば混同されてきた二つの観念——つまり「社会構造」と「社会関係」の観念——のちがいがはっきりするであろう。社会関係は、モデルをつくるのに用いられる素材であって、このモデル

が今度は「社会構造」そのものを明らかにするのである。それゆえどんな場合にも、「社会構造」がある社会で観察することのできる社会関係の総体にひきもどされることはありえないはずである。構造の研究は、社会事象のうちのある特定の領域を担当するものではない。構造の研究はむしろ、民族学のさまざまな問題に適用できるような一つの方法を設定することにあり、異なる領域で用いられている構造分析の形式に関連をもって

いる。したがってまず大切なことは、構造分析に固有のものであるこれらのモデルが、何から成り立っているかを知ることにある。この問題は民族学ではなく認識論に属するものである。なぜなら、以下に述べるような定義は、民族学で用いられるような素材をまったく必要としていないのだから。私の考えるところでは、構造の名に値するためには、モデルはもっぱら四つの条件をみたしていなければならない。

第一に、構造というものは、体系としての性格を示す。構造は、構成要素のどれか一つが変化すると、それにつれて他のすべてのものが変化するような要素から成り立っている。

第二に、あらゆるモデルは、一つの変換群——その変換の各々が族を同じくするモデルの一つに対応する——に属しており、その結果、これらの変換の集合がモデルの一群を構成する。

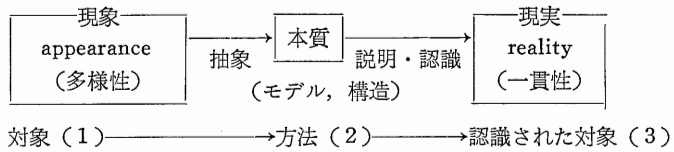
第三に、右に述べたような特性は、モデルの要素の一つに変化が起った場合、モデルがどのように反応するかを予見することを可能にする。

最後に、モデルは、それがはたらくとき、観察されたすべての事象が考慮に入れられているようなやり方でつくられなければならない<sup>10)</sup>。

上の文章からは、レヴィ＝ストロースも、「構造」のあり方について、ソシュールの記号」のあり方から多くを学んでいることがわかる。例えば、「構造の名に値するモデルの四つの条件」の第一における「体系」としての性格は、まさにソシュールの「記号」における「体系」の考え方そのものである。

けれども、ここでレヴィ＝ストロースは、「社会構造」という言葉を方法的なものとして使い、「社会関係」という对象的なものを表わす言葉と区別している。言いかえると、ソシュールの『一般言語学講義』において研究対象として規定されていた記号についての認識が、与えられた研究対象を明らかにするための研究方法として使われているのである。そして、この点は、フランス構造主義に共通に見られる特徴である（先のバルトにおいても、彼の研究する記号なるものは、実際のところ、彼によって自在に使いこなされる一種の方法概念であると考えることができる）。従って、研究すべき対象は、あらかじめ与えられていることが暗黙の内に前提されている。つまり、対象はあらかじめ与えられていて、それを説明するためのより有効なモデルをソシュールに学ぶことによって獲得し、対象をそれによって新たに認識するという、自然科学的ともいえる方法意識を人文・社会科学に適用しようとしたのがフランス構造主義であると言することができるのである。以上を図にすると次のようになる。

図 2 フランス構造主義（バンヴェニスト，レヴィ＝ストロース等）の場合  
 —対象（素材，要素）と方法（モデル，構造）の区別は明確（自然科学的）



このように、フランス構造主義において、対象はあらかじめ与えられていた。そこから、それを分析するための方法という意識が生まれ、その方法としてソシュールにおける記号の概念が有効なものとしたのである。けれども、ソシュールにおける記号学の構想とは、次のような点でズレていた。すなわち、フランス構造主義においては、図1における事物 Y すなわち「現実」は自明なものとして、それを成立させているとされる視点 X は全く考えられていなかった。従って、フランス構造主義における研究対象は、ソシュールの意図した「対象としての記号」ではない。さらに、視点 X' すなわち「方法としての記号」は、事物 Y を分析し説明するためのものとして、それが成立させているとされる事物 Y' も全く考えられていなかった。つまり、フランス構造主義では、ソシュールにおけるように、対象と方法との接点が問題にならないのである。

ソシュールの『一般言語学講義』においては「記号を」研究する学問として規定されていた記号学は、以上見て来たように、ソシュールに学んだフランス構造主義においては、実際には「記号で」研究する学問として展開して来た。そこから次のことが言える。

フランス構造主義は、ソシュールにおける記号という概念を方法的に受け取ることによって、構造主義という、人文・社会科学における研究方法上の改革を行い、「記号で」研究する学問としての記号学の研究成果を挙げてきた。ところで、ソシュール自身においては、記号学とは「記号で記号を」研究する学問であり、そこから『一般言語学講義』にあるような「記号を」研究する学問領域としての記号学という規定が由来していた。けれども、方法論上の難問から、「記号を」研究する学問としての記号学は、ソシュールにおいても、また、現在に至っても未だ成立していないのである。ということは、現在私達が記号学の出発点として引用している『一般言語学講義』の規定は、これまで実際に成果を挙げて来たフランス構造主義における記号学と、その成立基盤を全く異にしているものだということになる。そしてそれが、記号学をめぐる現在の曖昧な状況の根底にあるものなのである。

## 5. おわりに

ソシュールに由来するとされる「記号を」研究する学問としての記号学は、それに対する極めて大きな期待にもかかわらず、そもそもソシュール自身が構想した時点から方法論上の難問を抱えており、それが『一般言語学講義』において要請されている記号学の成立を阻んでいる。一方、ソシュールに学んだフランス構造主義においては、ソシュールの実際の研究方法に内在する記号で研究するという側面を生かし、独自の成果を挙げて来た。

本研究で明らかになった以上のことから、現段階における記号学のふさわしいあり方について、筆者は次のように考える。1. ソシュールの構想した「記号を」研究する学問としての記号学については、先に挙げた難問を解決できない限り、その成立はあり得ない。従って、私達は「記号を」研究する学問としての記号学をそれまでは研究することはできない。2. 現段階においては、フランス構造主義の「記号で」研究する記号学が、ソシュールに由来はしていてもソシュールの構想とは別に成立して、評価すべき成果を挙げて来ている。従って、現段階におけるふさわしい記号学とは、私達が研究することができる「記号で」研究する学問としての記号学である。

(注)

- 1) 正確には、1901年にソシュールの同僚であったアンリ・ナヴィル (Henri Adrien Navilles, 1845-1930) が『諸科学の新しい分類』(Nouvelle classification des science, 1901, Paris, F. Alcan) という著書の中で、ソシュールの見解として『一般言語学講義』におけるものと殆ど同じ内容を紹介している。
- 2) Ferdinand de Saussure, Cours de linguistique générale, 1916 (2e édition 1922), Lausanne et Paris, Payot, p. 33 (小林英夫訳『一般言語学講義』1972年, 岩波書店, 29頁)
- 3) Rorand Barthes, Le degré zéro de l'écriture, 1964, Paris, Seuil (渡辺淳・沢村昂一訳『零度のエクリチュール』1971年, みすず書房, 91-2頁)
- 4) 日本記号学会編『記号学研究1』1981年, 北斗出版
- 5) 阪本百大「記号学界の最近の動向」『記号学研究7・文化のインターフェイス』1988年, 東海大学出版会, 209頁
- 6) Ferdinand de Saussure, Cours de linguistique générale, Édition critique par Rudolf Engler, tome I, fascicule 1.2.3., 1968, Wiesbaden, Harrasowitz, p. 24-26 (前田英樹訳『書物』の草稿)『現代思想』第8巻第12号, 1980年, 67頁)
- 7) Émile Benveniste, Problèmes de linguistique générale, tome I, 1966, Paris, Gallimard, p. 21 (岸本通夫監訳『一般言語学の諸問題』1983年, みすず書房, 23頁)
- 8) Émile Benveniste, Problèmes de linguistique générale, tome I, 1966, Paris Gallimard, p. 54 (岸本通夫監訳『一般言語学の諸問題』1983年, みすず書房, 61頁)
- 9) Émile Benveniste, Problèmes de linguistique générale, tome I, 1966, Paris Gallimard, Avant-propos (岸本通夫監訳『一般言語学の諸問題』1983年, みすず書房, はしがき)
- 10) Claude Lévi-Strauss, Anthropologie structurale, 1958, Paris, Librairie Plon, (荒川他訳『構造人類学』1972年, みすず書房, 303-4頁)

(筑波大学博士課程 教育学研究科)【人文科教育】